

身体動作の構成による盆踊りの二大別

一飯山町の盆踊り・シカシカ踊りと対馬の盆踊り一

吉川周平

1. はじめに

香川県綾歌郡飯山町下法軍寺原川には、最後に「シカシカ踊り」という異様な動作をする踊りを伴う盆踊りが行われている。いったい、「盆踊り」と言われるものは、日本の各地で行われているが、本田安次氏が『芸能辞典』の「盆踊」の項で、「いわゆる盆踊の他、地方によっては様々の風流踊であることもある」というように、ひと口に「盆踊り」といっても、一種類だけではない。長崎県の対馬の厳原町では、本田氏がいう「いわゆる盆踊り」とは、身体動作の構成が異なる多くの踊りの曲が盆踊りとして踊られている。そこで、本稿では、飯山町下法軍寺原川の盆踊り・シカシカ踊りと、長崎県下県郡厳原町久根浜の盆踊りを対象として、「いわゆる盆踊り」をA型の盆踊りとし、久根浜の『師匠踊り』をのぞく盆踊りの踊りの曲をB型の盆踊りとして、それぞれの盆踊りの身体動作の構成の相違を明らかにしてみたい。

2. 飯山町下法軍寺原川の盆踊り・シカシカ踊り

飯山町下法軍寺原川の十王堂の境内（下法第一公民館）で、毎年八月十四日から十六日の夜、盆踊りとして、『一合まいた』『炭坑節』『岡田踊り』『島おどり』の踊りの曲を踊り、最後に『シカシカ踊り』を踊る。

このうち、『シカシカ踊り』以外は、後に述べるような身体動作の特徴をもつA型の盆踊りの曲である。

A型の盆踊りは、大分県東国東郡姫島村の盆踊りの足の動作の分析で明らかになった¹⁾ように、

- (i) 一曲の踊りは、一種類の一連の動作の繰り返しで構成されている。
- (ii) その一連の足の動作のフレーズのなかに、同じ足を二度ずつ続けて動かすくボンアシ（盆足）といわれる動作が含まれるものがほとんどである。

『シカシカ踊り』は、A型の盆踊りの曲を踊りついで、現在は午後十時ころだが、昔は夜がふけて子供たちが帰宅した十二時ころに、踊り始められる。太鼓のリズムに合わせて、三・四人が一組になって、とび出すように踊りの場に出てきて、手で足や体を打ったりしながら、跳ねたりし、二・三分で交替しながら、四・五十分踊り続ける。最初はゆるやかなリズムで踊るが、次第に速くなり、踊り手と囃子方のどちらかがついていけなくなるまで踊り狂ったというが、身体動作のうえでは、「いわゆる盆踊り」のA型の盆踊りとは異なっ

おり、一組のなかの一人だけが踊りながら転回したりするなど、動作に即興が許されている。

3. 厳原町久根浜の盆踊り

久根浜の盆踊りは、①ツエ（清め）、②太鼓踊り、③ツエ（口上）、④師匠踊り、⑤祝言、⑥手踊り、⑦綾踊りなどからなる。このうち、①と③のツエは男二人による杖を使った狂言風のものであり、②の太鼓踊りとともに、「いわゆる盆踊り」にはない曲目である。⑤の扇踊りの「祝言」と、⑦の綾棒を両手に持つての『綾踊り』は、「いわゆる盆踊り」とは異なる動作で構成されているもので、B型の盆踊りとしよう。その動作の構成上の特徴としては次のようなものがあげられる。

- (i) 一曲を構成する動作のフレーズが多い。
- (ii) 見物人からよく見られるような隊形、たとえば二列になって踊ることが多い。

久根浜の盆踊りのなかの④の『師匠踊り』は、厳原町で現在盆踊りを行っている、阿連、内院、内山、曲では見られない種類の動作で構成されているもので、注目すべきものである。すなわち、この踊りは、「師匠」と言われる者が、「エヅリ」といわれる七夕飾りのような竹を持って立つまわりを、踊り手たちが取りかこんで立ち、師匠が歌をうたうのに合わせて、右回りに動く。このような動作の特徴は、この踊りが、A型の盆踊りに属するものではないかと考えさせられ、注目させられる。

4. 二種の盆踊りのそのほかの相違

A型の盆踊りは、夜間に長時間踊り続ける所が多く、今は午後十時ころ終了する所がほとんどだが、現在も夜明けまで踊り続ける所もある。

これに対して、B型の盆踊りは、踊る時間が長くなく、久根浜もそうだが、日中にも踊る。また、B型の盆踊りは踊り手の数が限定されていて、完全に見物人に見せる踊りとなっている。

5. むすび

飯山町の『シカシカ踊り』はA型の盆踊りからかけ離れた踊りであり、久根浜の『師匠踊り』はほかのB型の盆踊りの曲のなかにあってA型の盆踊りと考えられる曲である。このように、A型とB型の盆踊りの曲が混在する所もあるが、全国的には「いわゆる盆踊り」であるA型の盆踊りが圧倒的に多い。しかし、B型の盆踊りも「盆踊り」と称して行われているのだから、まず、A型とB型の盆踊りに二大別して、盆踊りの身体動作の形と意味を検討することが必要であろう。紙数が限られているので詳述できないが、久根浜の場合にはA型の『師匠踊り』が盆に踊られていたところに、B型の踊りが後から流入したのではないのか検討することも必要であろう。

〈注1〉 吉川周平、1979年、「民俗舞踊の芸能」（『講座日本の民俗』8）、有精堂、190—197頁。